

---

# 勇者ヤマダ【見習い編】

高瀬 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者ヤマダ【見習い編】

### 【Nコード】

N32790

### 【作者名】

高瀬 悠

### 【あらすじ】

勇者を目指すド真面目な山田が、勇者になろうと奮闘する物語。  
「てめえら、マジで真面目にちゃんとやれ！」

気まぐれ不定期更新。

## 勇者見習いヤマダ

「お前に俺が越えられるか？」

伝説の勇者アドバルトはこう言った。

幾多の困難を、世界を、そして仲間たちを救ってきたその手で、  
幼い僕の頭をくしゃりと撫でて挑発的に微笑した。

「越えてみる。お前が本当に、勇者になりたいと願うならな」

僕は忘れない。

この誓いを。

彼の偉大なるその背を越え、いつか……

いつか必ず、最高の仲間たちとともに最強の勇者になってみせる、  
と。

それから数年後。

冒険家育成学校 初等部勇者科に入学して一ヶ月。

やっと、僕は勇者見習いとしての第一歩を踏み出すことになりました。

これから学校長が半ば強制で勝手に編成して作ってくれたチームとともに、チーム適性試験に挑まなければなりません。

冒険でのチームワークはとても重要です。

チーム一丸となって、学校長の出す全ての試験をクリアすることができれば、僕は晴れて勇者になることができ、その時のチームメンバーと一緒に冒険する大切な仲間になります。

僕は学校長が編成してくれたこのチームを……いえ、たぶん仲間と言っちゃっていいのかどうかも疑わしい仲間たちとともに、これから第一試験に挑むことになりました。

まずはレベルの低い魔物退治が第一試験です。

水色スライムを三十匹、頑張って討伐してきたいと思います。

一、**どんだけヤル気ねんだよ（前書き）**

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

「、どんだけヤル気ねえんだよ

【第一試験】 水色スライム三十匹、討伐。

実習先であるサラク平原へ馬鹿真面目に集合したのは、なぜか僕だけだった。

担任の男性教師 カルロウ氏は驚かなかった。平然とした顔で、持っていたバインダーに目を落とし、スラスラと何かを書いていく。

「山田洋一。第一チェック合格だな」

「あの、先生。僕の仲間が誰も来てくれません」

「そりやそうだろう。お前は勇者志願者だからな」

「先生、言っている意味がよくわかりません」

「何を言っている。勇者が旅立つ時は必ず一人だ。見習いの剣は持ったか？ 旅立ちの服は忘れずに装着したか？」

何かを誤魔化された気がした。

「あの……先生。すでに敵が僕の目の前にいるんですけど……」

「攻撃をしない限り、奴らも襲ってこないから安心しろ」

「安心している場合じゃないと思います。僕一人で三十匹なんて体力が持ちません」

「ほお」

カルロウ氏が感嘆の声を漏らす。

「つまり仲間が必要だと言ったんだな？」

「当然です」

いったい何の為にチーム編成なんかしたんだろう、と面白くない。

カルロウ氏は再びサラサラとメモし始めた。

「山田洋一、第二チェック合格だな」

「ただ一回りくらいですか？ この試験」

「チェック項目は以上だ。さて、次は仲間を冒険に誘って、いよいよ魔物退治だ」

「先生。昨日僕が仲間に渡した連絡プリントに、何か意味はあったんでしょうか？」

「ない。元々あいつ等がプリント一枚で集まるとは到底思えなかったしな」

「彼らにやる気はあるのでしょうか？」

僕がそう問うと、カルロウ氏はにこりと笑った。

「それをやる気にさせるのが勇者見習い 山田洋一。君の役目だ」  
「先生。それって単なる個々のモラルの問題だと思います」

一、冒険だっつつてんだろ！（前書き）

ご評価くださりありがとうございます。  
深くお礼申し上げます。



一、冒険だっつってんだろ！

僕の仲間だろうと思われる五人を紹介します。

まずは彼、初等部剣士科に所属しています一年生で同じ年の幼馴染み グランツェです。

剣の腕はとても優秀です。

連絡プリントを渡していたにも関わらず、彼は普通に教室にいました。

「お？ ヨーイチ。どうしたんや、その格好」

「連絡プリント見てくれた？」

「あー、あれか。見た見た。何するんや？」

「僕のこの格好見て、わからないかな？」

仲間を一人、確保しました。

次に彼、初等部魔法科に所属しています一年生で同じ年のクレイシスという人です。

彼は魔法の天才です。先生もびっくりするほどのすごい魔法を平然と使ったりします。なぜこの学校に入学してきたのか意味不明です。誰も理由を知りません。

連絡プリントを渡していたにも関わらず、彼も教室にいました。

「……何の用？」

「いや、あの。昨日渡した連絡プリント、見てくれたのかなって思っさ」

補足として、無口で無愛想で怖い人です。そして極めつけはグランツェととても仲が悪いです。

「よお、魔法使い。相変わらずムスツとした顔してんな」

「ああ思い出した。あの時のイカレ剣士か。暇潰しに喧嘩でも売りに来たのか？」

「なんやと、てめえ。やる気か？」

「ちよつとストップ！ 違うから。ほんとマジで、お願いだから二人とも喧嘩しないで」

仲間をまた一人、確保しました。

次は彼女、初等部召喚科に所属しています一年生で同じ年のウラちゃんです。

召喚の腕はまだまだですが、学校のアイドルとして男子にとっても人気のある、かわいい娘ちゃんです。

髪はおさげで眼鏡もかけていて、性格も大人しく、大変なドジっ娘です。

まあ、だからじゃないけど。連絡プリントを渡していたにも関わらず、彼女も教室にいました。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「い、いや、もういいよウラちゃん。僕もちゃんと迎えに行かなかったのが悪いし」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「いや、だからもういいって。ウラちゃん」

彼女が謝る理由。それは極度の方向オンチ。どうやら冒険には送迎バスが必要のようです。

三人目の仲間を確保しました。

次に彼女、初等部狙撃科に所属しています一年生で同じ年のリク

さんです。

狙撃の腕は名人並です。

髪はショート・カットで、性格は大変サバサバでツンケンとしています。

連絡プリントを渡したにも関わらず、彼女はなぜか屋上で魔弾銃を構え、数十キロ先の魔物を捕捉中でした。

「連絡プリント？」

「う、うん。見てくれたかなと思って」

「知らない」

「そ、そうですか……」

対応に困っていた僕との仲介に出て来てくれたのはクレイシスさんでした。

ちなみに、この二人は兄妹です。

「リク」

「何？ 兄さん」

「学校長との約束だっただろう？ 山田洋一という人物を一人前の勇者にしろ、と」

「兄さんはどうするつもり？」

「オレは従う」

「じゃあ私も従う」

はい。四人目確保しました！。

最後に……えーっと。彼、でいいのかな？

初等部格闘科に所属しています。一年生で同じ年のラウル君です。

彼はなぜか音楽室でリコーダーを吹いていました。

ただ今絶賛女装中です。これも敵をあざむくための演技なんだそうなんですけど……

「あの……すごくしっくり似合ってますね。普通に女子生徒に見え

るんですけど」

「ありがとうございます」

長いストレートの黒髪。声変わりしていない声音。まるでおとぎ話から出てきたお姫様みたいな、やんわりとした雰囲気の彼だった。「えっと、連絡プリントのことで来たんだけど、昨日渡したやつ見てくれた？」

「ええ。世界チャンピオンを決める格闘大会に出場できること、とても嬉しく思います」

「違います。あの……魔物退治の意味、わかっています？」

「ですから、格闘試合のことでしょう？」

「僕のこの格好見て、わからないかな？」

「あ、そういう意味だったの。気付かなくてごめんなさい」

はい。これで全員確保できましたあー、先生。

「手加減ぐらいしろよ、ちくしょー！」

はい、僕は今仲間を連れてサラク平原に来ております。  
サラク平原には水色スライムがうようと生息しています。

「先生。仲間が全員そろいましたー」

「よくやったな、山田。このメンツを全員そろえるとは、さすが勇者志願者だ」

「モラルの問題です。先生」

改めて【第一試験】 水色スライム三十匹、討伐。

「これから何するんや？ ヨーイチ」

「ここにいる水色スライムを三十匹討伐すればいいんだ。みんな得手伝ってくれないかな？」

僕は見習いの剣を構えて周囲を見回し、みんなに……みんなに  
つて、あれ？ いつの間にか三人減っている。

「なんや、そういうことやったんか。はよ言ってくれんとフライングで変なモンを討伐したやないか」

グランツェはスライムどころか隣平原に生息するレベル九のワールドウルフを討伐し、その毛皮を三十枚持っていました。

「……………」

「よし。水色スライム三十匹やな。楽勝」

「待って。実力はもう充分わかったから本気で待って。平等に分配しよう。僕のレベルが上がらなくなる」

「それもそやな。じゃあお前とウララで十匹。あとは俺がやる。どや？」

「う、うん。それでいいよ」

「ウララは？」

「は、はい。大丈夫です」

「よし。じゃあやるか」

「待って」

僕は待ったをかけた。

「他の人達が居ないんだけど……」

「ああ、アイツ等やったら恐らく『試練の洞窟』ん中や」

あーそうですか。スライムは眼中にないですか。

僕は仲間の実力を改めて知ることができた。うん、これも立派な勇者の役目だ。

ほんと。何の為にこのチームが編成されたのか、本気でわからなくなる。

グランツェは先立ってがんがん水色スライムの討伐を始めました。僕に悩んでいる暇はありません。

「ウララちゃん」

「はい」

「僕達も頑張って水色スライムを討伐しよう」

「あの、ヤマダさん」

「ん？」

「召喚、初めてやるんですけど。ここで試してみてもいいですか？」  
「いいよ」

僕は素直に了承した。

きつとウララちゃんのことだ。かわいい子犬とかドラゴンとか、  
そういうものを召喚するんじゃないかな？

ウララちゃんが真剣な表情で、手持ちの杖を使って地面に魔法陣  
を描いていきます。

僕はそれを微笑ましく見つめていました。  
かわいいな。一生懸命なその姿……ハッ。いかん。勇者としてあ  
るまじき言葉を。

魔法陣が完成し、ウララちゃんは召喚を始めました。

「火をまといし精霊よ。出でよ、リトル・ドラゴン」  
うん。やっている姿がすごくかわいい。

が、すぐにウララちゃんは何かに気付いたようで。

「あ。線一本まちがえちゃいました」

召喚されたのはドラゴンとは全く違う、火をまとった大男でした。  
大男は口から巨大な火の玉を吐き出すと、スライム九匹を消し飛  
ばし、山をも消し飛ばしてしまいました。

僕はそれを見て呆然とするしかありませんでした。  
残った討伐の数は一匹。

「ちくしょー！」

僕は泣きながら全力でその一匹に向かっていく。  
が、水色スライムは意外に手ごわく、僕だけがひん死の状態とい

う結果に終わってしまった。

【第一試験】

合格。



## 二、代理は仲間に入りません。

第二試験に入る前に、まずは作戦会議です。

四人は集合かけて集まってくれたのですが、どうしても一人来てくれません。

僕の勇者としての力量が問題でしょうか？

それとも

「作戦会議？」

「うん。みんな集まっているからリクさんも来てくれると助かるんだけど」

リクさんは相変わらず屋上で魔弾銃を構えていました。

僕は彼女の邪魔をしないように　以前、彼女の背後に近づいたら銃口を向けられたので　リクさんからある程度距離を置いた背後からそつと声をかけてみました。

彼女の返事はいつも素っ気無い。

「行かない」

「いや、えつと……」

僕は困りました。彼女のお兄さんであるクレイシスさんがこの場に居てくれたら助かるんですけど、僕は勇者志願者なのでいつまでも甘えるわけにはいきません。仲間をきちんと集めることも勇者の大事な仕事なのです。

「あの……リクさんが来てくれないのは、僕に勇者としての力量が足りないからですか？」

「それもある」

そこはオブラートにお願いします。僕は背を向けてしみじみと泣いた。

「嫌いな、私」

「僕がですか？」

「群れて生活するのが嫌いな。だから行かない」

「でも僕たちは仲間です。仲間なら作戦会議ぐらいは参加してください」

「作戦は兄さんから聞くわ」

「ダメです!」

「じゃあ私の代理を行かせるから。今回はそれでいいよね？」

「……」

まあたしかに。行きたくないという女の子を無理やり連れていくのは、かわいそうな気がしてきました。

「わかりました。じゃ今回だけ特別ですからね」

そう言って引き下がる僕は、勇者失格なのでしょうか？

二、バナナはおやつに入りません。

はい。僕は今仲間とともに、学校の相談室を貸しきって作戦会議を開いております。

議題はもちろん

「バナナ……？」

ではありません。

どうすればキング・オオイノシシをおびき寄せられるかの話し合いです。

それなのに、リクさんの代理である彼女 エメリアさんが……

ああ、紹介が遅れました。リクさんの代理人が来てくださいました。

初等部武器・防具製造科に所属していますエメリアさんです。朱髪をショートカットにし、活発で男まさりな方です。

製造の腕はよく知りません。

ですが、すごく面倒見が良くて、男女ともにとても人気のある方だというのは知っています。

そんな彼女が、突然こんなことを発言してきたんです。

「バナナはすごく栄養価の高い食べ物だと思っている」

「バナナはデザートだ」

と、クレイシスさんがなぜか真剣にそう反論しました。

クレイシスさんが話に乗ったことで、今度はグランツェまで話につられていきます。

「おい、魔法使い。お前何言ってるんや？ バナナはご飯や」

それになぜかうらちゃんまで真剣に、

「そうですね。南国の方々はバナナを主食にすると聞きますし」

ラウル君まで、

「それじゃバナナはおやつ？ それともご飯？」

僕はバンバンと黒板を叩いて話を戻すようみんなに言いました。

「今バナナ関係ないよね？ この話し合いにバナナはすごく関係ないよね？」

「じゃ、お前はと思うんだ？ 山田洋一」

「え？」

クレイシスさんがバナナ話を振ってきました。

「ヨーイチもバナナはご飯だと思うよな？」

グランツェも振ってきます。

そしてなぜかウララちゃんの手を組んで、拜むように訴えてきます。

「勇者志願のヤマダさんがデザートと申されるなら、わたしはそれに従います」

「え？ いや、何の話？」

キヨドる僕の目の前にエメリアさんが近づいてきて、胸倉を掴み、脅迫してきました。

「お前の一言でこのバナナの命運は決まる」

と、手持ちのバナナを僕の頬にぐりぐりと押し付けてきました。

僕はバナナを指差して言いました。

「バナナだよね？ これ、ただのバナナだよね？ 関係ないよね？ 第二試験にすごく関係ないよね？」

「ヨーイチ！ バナナはご飯や！」

グランツェの言葉に、クレイシスさんが鼻で笑ってツツコミます。

「バナナはデザートだ」

「何やと、魔法使い！」

「もう一度言っ。バナナはデザートだ」

「上等だ、てめえ。外出ろや！」

「望むところだ」

大変です。クレイシスさんとグランツェの間でバナナ戦争が始ま

ってしまいました。

僕はすぐに二人の間を割って、喧嘩を止めます。

「これってすごくどうでもいい喧嘩だよな？ ただのバナナだよな？ 第二試験に関係ないよね？ なんでバナナの話だけでそんなに盛り上がるの！」

「ヤマダ」

ドスのきいた声でエメリアさんが僕の肩を掴んできます。

恐る恐る振り返れば、すごく怖い形相でエメリアさんが僕のことを睨んでいました。バナナを片手に掲げて、

「男ならハッキリ決める。だからお前はヘタレなのだ」

「もうやめてください！」

ウララちゃんが僕をかばってエメリアさんの前に割り込んできました。

「これ以上ヤマダさんを責めるのなら、わたしがお相手します！」  
と、魔法の杖を構えました。

って、待ってウララちゃん。バナナだよな？ これってすごくどーでもいいバナナの話だよな？

僕はラウル君に助けを求めようと目を向けました。

しかし、ラウル君はなぜか突然リコーダーを吹き始めました。

僕は苛立たしく頭を掻いて叫びました。

「もーいい！ わかったよ！ 僕が先生に訊いてくればいいんだろ！」

と、いうわけで。

「先生。バナナを食料として討伐必需品に認めてください」

「ダメだ」

「ですよね」

バナナがデザートだろうとご飯だろうと、討伐には一切関係ない  
ようです。

二、野生の動物にエサを与えないでください。(前書き)

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

## 二、野生の動物にエサを与えないでください。

### 【第二試験】 キング・オオイノシシ、討伐。

はい。僕は今、五人の仲間とタカタカ森に来ています。  
森の中はイノシシだらけでした。  
キング・オオイノシシはどこにいますのでしょうか？

あ、そうだ。ちなみに代理人は討伐の仲間として認められないので、エメリアさんはここに居ません。

そういうことで、リクさんはちゃんとチームの一員として参加してくれました。

ありがとうございます。

僕が礼を言くと、リクさんは素っ気無くこう言いました。

「貸し、一つだから」

酷すぎます、リクさん。

「で、どーするんや？ ヨーイチ。片っ端から退治していくか？」

グランツエが攻撃態勢に入ります。

「待つて。効率良くやっていこう」

僕は仲間に待ったをかけました。

今回みんなバラバラではなく、ちゃんと僕の指示を待つてくれます。

僕は緊張に胸を高ぶらせながら、作戦を言いました。

「みんなの力は確かに強い。でもいくら強くたって体力に限界がある。山岳イノシシや暴れイノシシを片っ端から相手にしていたら、



いざキング・オオイノシシが出てきた時にチーム一丸となつての攻撃が難しくなる。だから、温存しながら効率良く戦おう」

なんか僕、今スゲーかつこいいことを言つたと思う。なぜならみんな、僕よりすごく強い人達だからだ。その人達が僕の作戦を素直に聞き入れてくれている。僕ってまるで勇者みたいだ。

「なるほどな」

クレイシスさんが感心してくれました。

「さすが勇者志願者やな、ヨーイチ」

グランツエまで。

リクさんが魔弾銃を手に行動を開始します。

「じゃあ私はあの小高い山から援護する」

ラウル君が指の関節をパキパキ鳴らしながら先頭に進み出ます。

「じゃあボクが右をやるね」

え？

「じゃ俺は左な」

あ、あれ？ ちょっと待って。

「左はオレだ、イカレ剣士。お前は右斜めを行け」

「右斜めってどこや！ 左は譲らん！ てめえが右斜めに行けや！」

「早い者勝ちだ」

「なんやと！」

「ちよつと待って！」

僕はみんなを止めましたが、誰も聞いてくれません。

唯一残つたのはウララちゃんだけでした。それ以外は全員、敵に攻撃を始めています。

ウララちゃんが僕の手を握り締めて言いました。

「さあ、行ってくださいヤマダさん」

「は？」

「雑魚はこちらで引き受けます。ヤマダさんは早く手持ちの誘いエサでキング・オオイノシシを見つけ出してください」

「ちよつと待って」

「あなたの勇氣に感動しました。わたし達はあなたを援護します。だからヤマダさんは何も気にせず、キング・オオイノシシをここまです誘い出してください」

その言葉を残し、ウララちゃんも戦いを始めてしまいました。

勇者。それは勇氣ある者。

僕はアイテム袋の中に入れていたキング・オオイノシシの誘いエサを取り出しました。

これから一人でキング・オオイノシシをここまで誘い出して来なければなりません。

でもこれって、絶対みんなやりたくなかったやつだよね？

この係りになる人はジャンケンで平等に決めようって、そう決めていたはずだよね……？

上手い具合に押し付けられた気がする。

僕は泣きながら森の中を走った。

自らエサとなって。

二、僕にヒーローは似合いません。

物語といえば大抵、かつこいいヒーローとかわいいヒロインが華麗に敵を倒して活躍するものです。

ええ。たしかに僕も、小さい頃はそういうものに憧れていました。勇者を目指したのもそれが理由です。

重装備を身にまとい、赤いマントをなびかせ、魔王を相手に大剣を構えて「さあ行くぜ！」なんて仲間を統率して敵陣に突っ込んでいく。

それが僕の夢であり、憧れでした。

「ぎゃあああああつ！」

それなのに僕は今、キング・オオイノシシ相手に逃げ回っています。

キング・オオイノシシを誘い出すこと。これが僕の役目です。走る先に、ようやく仲間たちの姿が見えてきました。助かったあー！

「みんなー！ キング・オオイノシシを連れてきたからー！」

僕は大声で叫びながらみんなに知らせました。みんながこっちに注目します。

「よくやった、ヨーイチ！ さすがや！」

グランツェが嬉しそうに僕に向かって駆け寄り、そして大剣を構えなおしてカッコよく僕の横を交錯していきます。

「あとは任せろや、ヨーイチ」

「ごめん、よろしく」

非力な僕を許してください。

そしてまた僕の横を誰かが交錯していき　え？

誰かではありませんでした。僕の横を交錯していったのは攻撃魔法です。

後ろでグランツェが悲鳴を上げます。

「だあ！　あつぶねえだろ、ボケ魔法使い！　俺らを殺す気か！」

僕の走る前方にはクレイシスさんが右手を突き出して構えています。

クレイシスさんがぼそりと何かを言っています。

「オレは退かない。てめえらが退け」

「はい、ごめんなさいです」

僕は素直に道を開けるようにして逃げました。

また攻撃魔法が僕の横を通り過ぎていきます。

「ええかげんにせえや！　このボケ魔法使い！」

グランツェがキング・オオイノシシと戦いながら叫んでいます。

しかしクレイシスさんは聞く耳持たない様子で、また魔法を放っていました。

僕は息を切らしながらようやくみんなと合流します。

「みんな揃<sup>そろ</sup>つてる？」

ラウル君が向かってきた山岳イノシシどもを蹴ったり投げ飛ばしながら、

「雑魚はだいぶ片付いてきたね。あとは僕一人で何とかなるから任せよ」

クレイシスさんが僕に言います。

「山田、お前はラウルと一緒にイノシシどもを片付けろ。オレはリクとイカレ剣士とともにキング・オオイノシシをやる」

僕はそれに同意しました。

「わかった。　ん？　あれ？　ちょっと待って」

気付いて僕は、慌ててクレイシスさんを引き止める。

「何か不満か？」

「そうじゃなくて、ウララちゃんは？」

「え？」

言われてそういえばと、クレイシスさんが辺りを見回す。

「あれ？　どこかそこら辺にいて思っていたんだが……」

「クレイシスさん、あとお願いします。僕ちよつとウララちゃんを探します」

僕はすぐにその場を駆け出した。

「あ、ちよつと待て山田！」

クレイシスさんに呼び止められるも、僕は無視して走った。

クレイシスは焦るようにラウルへ声をかけた。

「ラウル、悪いがここはお前一人で片付けてくれ」

「うん、このくらいの量ならいいよ。ヤマダ君は？」

「答えている暇はない。とにかく頼んだぞ」

「おっけー」

持ち場を任せ、クレイシスはキング・オオイノシシのところにいるグランツエの元へと走った。

駆け寄るクレイシスにグランツエは不機嫌な顔で、

「なんや、お前今頃になって。これは俺の獲物や」

「イカレ剣士。お前はすぐに山田のあとを追え」

「なんでお前の指示に従わな　」

「山田が誘きエサを持ったままウララを探しに行った。キング・オオイノシシの存在は一頭だけとは限らない。お前はすぐに山田のあとを追え。こいつはオレとリクで引き受ける」

「……わかった」

グランツェは大剣を鞘に収めた。念を押すように尋ねる。

「キング・オオイノシシ相手に戦力二人で本当に大丈夫なんやな？」

「くどい。早く行け」

グランツェは舌打ちして踵を返すと、山田のあとを追いかけた。

二、それでも僕は勇者です！（前書き）

お気に入り登録をしてくださった三名の方、ありがとうございます。  
ます。

心よりお礼申し上げます。

「二、それでも僕は勇者です！」

「ウララちゃん！」

僕は居なくなったウララちゃんを探して森の中を走り回りました。もちろん森の中はイノシシだらけで、何頭ものイノシシが僕に向かって襲い掛かってきます。

「このッ！」

僕は見習いの剣を構えてイノシシに突撃しました。

敵うはずがないんです。

だって僕はスライムごときで苦戦するくらいの力でしかないんだから。

イノシシに体当たりされて、僕は大きく吹っ飛びました。樹にぶつかり、地面に倒れても。

僕は立ち上がって見習いの剣を構えます。

「邪魔するな！僕はウララちゃんを探しているんだ！」

きつと彼女のことだ。道に迷ってどこかで泣いているに違いない。イノシシは前足で地面を掻いていました。また体当たりしてくるつもりです。

「退けよ！あっちに行け！」

脅しの効果はきいていません。

イノシシが突進してきました。

僕は雄たけびをあげながら剣を振りかぶって突撃しました。

剣は弾かれ、僕はまた吹っ飛びました。

そんな時です。

「ヨーイチ、剣ってのはこう扱うんや」



グランツェが僕と入れ替わるようにしてイノシシに攻撃しました。  
一撃必殺。

大剣を一振りで、グランツェはイノシシを倒しました。

「グランツェ！」

僕は驚きと嬉しさに地面から飛び起きました。

グランツェは見る間にイノシシを一掃していきます。

「ええか、ヨーイチ。剣はチャンバラやない。技や」

「ぎ？」

「木の棒みたくポカスカと叩き合うんやなく、俺みたいに技でキメるんや」

言葉と同時にグランツェはまた一振りしてイノシシを倒しました。  
僕は自分の持つ見習いの剣を見つめました。

するとどこから女の子の悲鳴が聞こえてきます。

僕はハッとして叫びました。

「ウララちゃん！」

「行けや、ヨーイチ。援護はしてやるから周囲なんて気にせず走れ」  
僕は見習いの剣を握り締めました。

「わかった」

グランツェの言う通りに、周囲なんて気にせず走りました。  
そしてその先に、ウララちゃんを見つけました。

彼女がイノシシの攻撃を受けています。

僕は見習いの剣を構えて雄たけびをあげながら、そのイノシシに突撃しました。

見よう見まねで一振りします。

倒すことはできなかったけど、何とかダメージを与えることができました。

僕はウララちゃんを守るようにして背にかばいます。

「大丈夫？ ウララちゃん」

「ヤマダさん！」

後ろからウララちゃんが抱きついてきました。

相当怖かったのでしょう。彼女は震えていました。

グランツェがイノシシを一頭倒して叫んできます。

「ヨーイチ！　すぐに持っている誘きエサを捨てるんや！」

森にただならぬ気配を感じました。

「キング・オオイノシシや！」

グランツェの言葉とともにキング・オオイノシシが姿を現しました。

僕は急いで持っていた誘きエサを遠くに投げました。

そして、

「行こう、ウララちゃん」

「はい」

僕はウララちゃんの手を取り、グランツェとともにその場から逃げました。

エサは捨ててしまったので、キング・オオイノシシが僕らを追いかけてくることはありませんでした。

その後、クレイシスさん達とも合流することができ、キング・オオイノシシを一頭倒したことを聞きました。

第二試験は何とか合格のようです。

「　僕だけ追試？」

学校に戻った僕は、カルロウ教師に第二試験の結果を報告しました。が、

「なぜ僕だけ追試なんですか？」

「山田。お前は何頭イノシシを倒すことができた？」

「……………」

そういえば、僕は一頭も倒していません。

「ウララでさえ一頭は倒しているんだぞ？」

あー、そうだったんですか。

「追試として【水色スライム十匹討伐】を、お前一人でやって来い」

その日の放課後。

僕は泣きながら一人で、スライム十匹を討伐しました。

はつきり言ってもいいです。(前書き)

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心よりお礼申し上げます。

はっきり言ってもいいです。

第二試験に無事合格した僕たちはいよいよ第三試験に挑むことになりました。

ここまでとても順調なチームワークです。

なかなか良い感じの仲間なので、僕は正直ホッとしています。

ですが、勝負はここからです。

第三試験はレベルが一気に高くなります。

見習い勇者の大半が挫折すると言われている第三試験。

荒地に住むゴブリンから、盗まれた秘宝 『スーヤの宝石』を奪還すること。

彼らは小人サイズながらも集団で襲ってくる強敵です。

気性が荒く残虐な生き物なので、命を落とす危険もあります。

この試験で重要視されるのはチームワークです。

生きるか死ぬかはチーム内の助け合いにかかっています。

僕たちのチームはたしかにまとまりが無いかもしれませんが。

でもみんな、互いを気遣う良い人たちだからきっと大丈夫です。

僕はそう信じています。

三、それってどうでもよくね？

第三試験の前にお決まりの作戦会議です。

「　　って、あの……エメリアさん？」

「なんだ？ ヤマダ」

「どうして僕が席に着かなければならないのでしょうか？」

「試験で大事なのはチームワーク。チームは揃ってなんぼのもの。席が後ろになったからと言って文句言わない」

席が後ろはどうでもいい。

「あの、僕は勇者なんですけど。勇者はチームのリーダーであって、そのリーダーが司会進行を　　」

ぷーぴー。

僕の隣でリコーダーの音が聞こえてきます。

目を向ければ、いつの間にかラウル君が隣の席に座っていました。ぷーぴー。

しかも音程が微妙に変です。

「そんなことよりヨーイチ。オセロや、オセロ。オセロしようや」

僕の前の席に座っていたグランツェが突然満面の笑みで振り返ってきます。

僕は戸惑いました。

「そんなことって……。今ゲームやっている場合じゃないよね？」

「ヨーイチ、お前。そんなこと言うて、このまま勝ち逃げする気かな？」

あー。まだ気にしてたんだ、あのこと。

そういえば昨夜、グランツェが僕の部屋に押し入ってきて『暇やからゲームしよや。やる言うまで帰らんからな』と駄々こねてきたので相手をしてあげたことを思い出しました。

結果は何度やっても僕の圧勝。

「わ、わかったよ。でも今は作戦会議中だし……とりあえずゲームは学校が終わってからにしよう」

「嫌や」

笑顔で全力拒否されてしまいました。

そういえばグランツェは昔からとても負けず嫌いな性格だったことを思い出しました。

「で、でもさグランツェ。よく考えてごらんよ。げ、ゲームしようにもマス目も何もないじゃん」

すると遠く離れた席に座っていたウララちゃんが急に立ち上がった、とてとてと僕の側に駆け寄ってきました。

「ヤマダさん。私、ヤマダさんの為なら舞台を作ることだっていいません」

「ちよつと待つて。舞台つて何のこと？」

「私がこの世界にマス目の舞台を召喚します」

「いや、本気で待つて。急にスケールでかくなったよね？ 世界規模でゲームやつちゃうと、ある意味勇者じゃなくて魔王って呼ばれるようになるから、僕」

離れた席でクレイシスさんが鼻で笑います。

「オセロで世界征服も悪くない」  
却下します。

僕はバンバンと机を叩いて話を戻しました。

「オセロとか世界征服とか作戦会議に関係ないよね？ 今重要なのはゴブリンをみんなで倒す方法だよね？」

「お前が仕切るな、ヤマダ」

「ぱーん、と。黒板消しが僕の顔にクリーンヒットしました。投げたのはもちろんエメリアさんです。」

こほんと咳払いして、エメリアさんは議題を進めました。

「今重要なのはゴ布林退治ではなく、どうすれば憧れの人にチョコを渡すことができるかだ。」

バレンタインデーとは女子が男子に想いを届ける大切な日だ。

それなのに学校はチヨコの持ち込みを禁止としている。

そこで女子を代表して言おう。

チヨコはおやつか否か？」

チヨコがおやつだろうとそうでなかつと、非モテの僕にはとてもいいことですけどね！



### 三、旅立ち前の説明書（前書き）

お気に入り登録してくださった二名の方、ありがとうございます。  
す。

心からお礼申し上げます。

### 三、旅立ち前の説明書

冒険に旅立つ時、今どきの勇者御一行はバスや汽車を使って現場に行きます。

なぜならその方が安全だし、なにより現場に到着するのが早いからです。

駅のホームで一人静かに汽車を待つ僕に、カルロウ教師はこう言いました。

「またお前一人か、山田洋一」

僕はビシッと手を挙げて発言します。

「はい、先生」

「どうした？ 山田」

「公共機関を使って冒険するって、何か間違っていないですか？」

「良い質問だ、山田。世の中にはな、モンスター・ペアレンツという脅威の魔物が存在する。学校の先生たちでも倒せない危険な魔物だ。」

より安全で安心な冒険をさせないとモン・ペアが学校を襲撃に来るんだよ」

「それ聞いて、なんだかゴブリンを一人で倒せそうな気がしてきました」

「ははは。何を言っている山田。安心していいのは道中だけだ。そこから先は自己責任だから気をつける」

「先生こそ、モン・ペアの災害に気をつけてくださいね」

「面白いこと言うじゃないか、山田。だからお前はいつまで経っても勇者志願者なんだ。たまには一人でカッコ良く逝ってこい」

「先生。言葉の中に誤変換があります」

「気にするな」

そう言って、カルロウ教師は右手首に視線を落とすと腕時計を確

認しました。

「ところで山田。そろそろ本気で仲間を集めに行かないと汽車が出るぞ」

僕は拳を固め、怒りを押し殺しつつ答えます。

「わかっています」

「まあ、仲間を集めるのは勇者の旅立ちの基本だからな」

「モラルの問題です。先生」

三、旅立ちだって言ってるんだろ！（前書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

三、旅立ちだって言ってるんだろ！

とりあえず。

まずは捜しやすそうな仲間を順番に確保していきます。

そんな時です。

駅内に案内を知らせる音色が流れました。

『迷子のお知らせをいたします』

はい。さっそく一人確保しました。

「ごめんなさい、ヤマダさん」

「いいよ。気にしなくて。それよりみんながどこにいるか知らないかな？」

尋ねると、ウララちゃんは元氣なく俯いて首を横に振りました。

僕はハハと笑って謝る。

「そうだよね。ごめん。じゃあ二人で一緒に探そう」

そう言って、僕はごく自然な仕草でウララちゃんの手を取った。

その時、

「ひゃあっ！」

「え？」

急にウララちゃんが悲鳴を上げて僕の手を激しく手を振り解きました。

そんなに僕と手を握るのが嫌だったのだろうか。

僕は内心ものすごくショックを受けながらも平常心を装い、また

謝る。

「う……ごめん」

「……」

ウララちゃんは僕に触られた手を胸に抱き、真っ赤な顔で黙って俯いていく。

え？ これってもしかして、恋

「セクハラね」

僕の背後から冷めた口調でリクさんが言ってきました。

「って、うおっ！」

僕は遅らせながら驚きの反応を返した。

「いつから居たんですか？ リクさん」

「ずつとよ。あなたに気配を悟られるようじゃ狙撃者としての自信をなくすわ」

それって新手のストーカーですか？

はい。二人目確保しました！。

僕とリクさんとウララちゃんは次なる仲間を捜して、駅内の売店をウロウロしていました。

すると、

「あ！ ヤマダ君だ。それにリクたんもウララちゃんも一緒だー」

売店から大量の駅弁を買い込んだラウル君が嬉しそうに手を振ります。

いやいや何事ですか、ラウル君。

「ら、ラウル君。そ、その弁当……」

恐る恐る僕が大量の弁当を指差すと、ラウル君はかわいく「きやは」と笑って、

「買い占めちゃった。全部」

「か、かい……買い占め」

「そ。お店の弁当全部買い占めちゃった。一応五十四人分あるみたいだから、みんなの分もあると思う」

充分だと思っています。

ふと、ラウル君の後ろの売店からクレイシスさんも出てきました。何やらラッピングされた箱を大事そうに持っています。

僕は恐る恐る声を掛けてみました。

「あ、あの、クレイシスさん？」

「なんだ？」

「それ、なんですか？」

「これか？ オセロゲームとやらが売られていたから思わず買ったみた」

いやいや何事ですか、クレイシスさんまで。

「あ、あの……クレイシスさん。僕達これからゴブリン退治に行くんですよ？ わ、わかっていますよね？」

「オセロで世界征服も悪くない」

「……………」

真顔でそう返されてしまいました。

はい。二人まとめて確保です。

最後はグランツエです。

さて彼はいったいどこへ行ったのでしょうか？

「ヨーチー！」

改札口からグランツエが手を振ってこちらに走ってきます。

しかもすごく爽やかな笑顔です。

グランツエは言いました。

「さっきそこでトランプ売ってたから買ったんやー！ 次はトランプで勝負やー！」





三、ライバルなんてどうでもいいんです。（前書き）

お気に入り登録してくださった方へ。

ご登録くださりありがとうございます。心からお礼申し上げます。

### 三、ライバルなんてどうでもいいんです。

勇者にライバルはつきものです。

僕の場合、そのライバルが魔王だったなら物語に面白みがあるのですが、はっきり言って僕はそこまで強くありません。

僕とVSできるのはせいぜい水色スライムくらいです。

一体いつになったら勇者らしく天空の鎧に赤いマント、背中に大剣を携えて、魔王城が見える断崖に佇み、背後にいる仲間に向けて『ここまで来たんだ。もう後には引けないぜ』などという台詞を力ツコ良く言えるのでしょうか。  
先が遠すぎて見えません。

そんなことはさておき。

僕達は一つ遅れの汽車でようやく出発することができました。

ひとまず安心です。

これから血もなく汗もなく涙もなく、快適な道を行くゴブリン退治の冒険が始まるわけですが……。

なんだか自分で言っていて、すごく虚しいです。

ふと、車窓から外へと視線を移すと、広い草原で巨大な亀の魔物が暴れていました。

中規模パーティが十チームほど、協力し合いながらその亀と戦っています。

僕は窓辺に軽く頬杖をつき、その光景を見ながら「ふう」とため息を落として呟きました。

「そろそろ仲間を増やしていった方がいいのかなあ……」

僕の二つ隣　三人腰掛け椅子の端　通路側に座っていたラウ

ル君が、弁当をはむはむと食べながら他人事のようにこう言います。  
「増やしてもいいけど、弁当はもうないよ？」

弁当なんてどうでもいいんです。

僕としては買い占めた弁当を短時間で全部食べてしまったラウル君の胃袋が気になりますけど、今はどうでもいいんです。

ただ肝心なのは

「どうすればロイヤルストレートフラッシュが出来るか、だ」

僕の向かいの窓際席に座っていたクレイシスさんが、トランプを片手に真顔でそう言ってきました。

僕は「はあ」と重いため息をこぼします。

トランプなんてどうでもいいんです。

ただ肝心なのは

「なんや、魔法使い。負けそうやからってヨーイチにアドバイスもらうつもりか？」

クレイシスさんの隣で、グランツェがトランプを片手に勝気な笑みを浮かべていました。

癪にさわったらしく、クレイシスさんが不機嫌な顔で手持ちのトランプの裏側をグランツェに突きつけ言い返します。

「だったら勝負してみるか？ イカレ剣士」

「ええで」

二人は同時に手持ちのトランプを公開しました。

「くらえ、クソ魔法使い！ 俺のは『ロイヤルフラッシュ・きゅーてい萌え萌え魔法少女』や！」

「残念だったな、イカレ剣士。こっちは『ラブリー・ていくるニヤンにゃんメイド娘』だ」

「って何の勝負！？ それ！」

僕は突っ込まずにはいられませんでした。

どうやら駅の売店でパーティの一人がゲットしたのは、謎のトランプアイテムだったようです。

アイテム収納袋がいっぱいになったら真っ先に捨てようと思いま

す。

ふと、僕の隣　ラウル君と僕との間に座っていたリクさんが、  
淡々とした口調で話を戻してきました。

「さっき仲間を増やすって呟いていたけど、あと何人の勇者を増やすつもり？」

ひどいです、リクさん。僕に不満があるのはすぐわかりました。  
ちよつと隅っこにうずくまって泣いてもいいですか？

するとリクさんの言葉を受けて、僕の向かいの通路側に座っていたウララちゃんが、はっと顔を上げて驚きます。

「え！　ヤマダさんって増殖できるんですか？」

何の不思議ですか、それは。

もしかしてウララちゃん……天然ですか？

そんな時でした。

「おやおや。間抜け勇者のパーティには、こんなにかわいい子猫ちゃんこねこちゃんが三人もいるのかい？」

見知らぬ声の闖入いふちいりこに目を向ければ、見下すように僕らを観察する金持ちの坊ちゃん然とした男がいました。

歳は僕達より少し上だと思われます。

白い上下のスーツに、胸ポケットには真つ赤なバラ。

そのバラを優雅な仕草で手に取り、男は軽くバラに口付けると微笑みながらこう言いました。

「このパーティから何人か引き抜いて、ボクちんのパーティに入れちゃおうかなあ」

「なんやと！」

グランツェが喧嘩腰になって立ち上がります。  
そんな時でした。

また別の方向から声が掛かります。

「ルーキーのパーティ崩しは止めなよ、勇者<sup>リーダー</sup>」

また新たなキャラの出現です。

白い法衣をまとった強そうな魔法使いの男です。

この人も、歳は僕達より少し上だと思われます。

魔法使いの男はすぐにクレイシスさんへと目を移しました。

そのまま二人は無言で睨み合います。

知り合いなのでしょうか？

魔法使いの男は何を思ったのか、急に鼻で笑って小馬鹿にするように言葉を続けました。

「こんな奴がいるパーティなんだから崩しても意味がない。放っておいてもこのパーティは自滅する。」

そうだろう？ 元パーティ潰し・黒魔道師クレイシス<sup>スレイヤー</sup>」

三、 気に入るところはそこですか？（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心よりお礼申し上げます。

### 三、気にするところはそこですか？

人は誰でも、他人に言えない悩みや過去があるものです。

「なんや、アイツ。急に態度悪うなったな」

目的の駅に到着した僕たちは、駅のホームで二手に分かれることになりました。

無言でどこかへ去っていくクレイシスさんとリクさんの背中を見つめ、グランツェがふてくされたようにそう呟きます。

僕は重いため息を吐きました。

何もこんなときにチームばらばらにならなくてもいいじゃないか。  
「パーティ・スレイヤー言うたら魔王を支持する闇組織やろ。普通やったら国際指名手配されているもんやないんか？」

「わかんないよ、そんなこと。学校長もそういう事情とか何も話してくれなかったから……」

ラウル君が心配そうに僕の顔を覗き込みながら問いかけます。  
「彼等どこかに行っちゃうよ？ 呼び止めないの？」

「……」

僕は悩みました。

ウララちゃんが僕の前に回りこんで、両拳をかわいくギュツと握り締め、真剣な表情で僕に言います。

「二人は私たちの大事な仲間じゃないですか。呼び止めましょう、ヤマダさん」

そうだね、ウララちゃん。

僕は意を決し、二人を呼び止めることにしました。

勇者たる者、仲間の過去を気にしたらいけないんです。

僕は踏み出しました。

「ちょい待てや、ヨーチ」

グランツェが僕の肩を掴んで引き止めます。

僕は首を傾げてグランツェへと顔を向けました。

「アイツ等呼びに行くの、ちょい待てや……」

複雑そうな表情をにじませて、グランツェは気まずくそう言います。

僕は苛立つ心を抑えられませんでした。

「なんでだよ？ グランツェ」

「ヨーチ」

「何？」

「お前、どう思う？」

「仲間だよ。リクさんもクレイシスさんも　これから先、誰にどんな過去があるかと僕たちは仲間だ」

「違う、そういうことやない」

「え？」

グランツェはぼりぼりと頬を軽く搔きながら言いくそくに、

「俺ずっとアイツのこと見習いや思て『魔法使い』って格下で呼んでいたから、その……いきなり『魔道師』って言い換えたら……嫌やないか思つて」

気になるところはそこですか？

僕たちはリクさんとクレイシスさんを追いかけました。

やっと二人の背を見つけ、僕は叫びます。

「待ってよ、二人とも！」

するとクレイシスさんが足を止めてくれました。

リクさんも足を止めてクレイシスさんに尋ねます。

「どうしたの？ 兄さん」

「……」



背を向けたままの二人に、僕は訴えました。

「第三試験はみんなでゴブリン退治に行くんだろう？ 過去がなんだよ。チームワークがないと勝てない相手なんだから、今更　こんなところでバラバラになることないだろ！」

僕の想いは届いたのでしょうか？

リクさんがクレイシスさんに尋ねます。

「　だそうよ、兄さん。どうするの？」

クレイシスさんは静かに、持っていたオセロゲームに視線を落としました。

ぼそりと呟きます。

「リク」

「何？　兄さん」

クレイシスさんは自嘲するように鼻で笑って言葉を続けます。

「……今更だよな」

「そうかしら？」

「これを買った時にお釣りをもらい損ねたんだ」

「諦めて兄さん。今頃きつと募金箱の中よ。植樹に貢献したと思って前向きに考えるべきね」

「自分の金が植樹に使われたかと思うと、今度から山の中で気軽に攻撃魔法が放てなくなるな」

三、それはどうでもよくないです。

町に到着した僕たちは、学校の指示通り、さっそく町長の家に依頼を受けに行きました。

町長の家に辿り着いた僕たちは、玄関先に立っていた町長らしき男性を見つけました。

きつとこの人が町長なのでしょう。たしかにそれらしい格好をしています。

彼の頭上には金色の吹き出しが付いていました。

その吹き出しにはケーキの絵が描かれてありました。

「……………」

僕は町長の吹き出しを見つめたまま真剣に、声を掛けようかどうか本気で悩みました。

「……って、何してんのやヨーイチ」

無言のまま町長と向かい合う僕の背後から、グランツェが苛立たく声掛けてきます。

僕はグランツェへと振り返り、吹き出し部分に指を向けました。

「え、だって……」

なんでケーキの絵？

普通はクエスチョンマークとかお金袋の絵とか巻物の絵とか宝箱の絵とか

ウララちゃんが心配そうに尋ねてきます。

「話しかけないんですか？」

この違和感は僕だけですか？

するとクレイシスさんが真顔で会話に割り込んできました。

「いや、もしかしたらコイツは町長じゃないかもしれない」

お。さすがクレイシスさん。僕も同感です。

「依頼人の吹き出しはドクロマークが普通だ」

話しかけたくないです。

ラウル君も会話に割り込んできます。

「じゃあ罇の絵なら無難そうじゃない？」

罇の意味がわかりません。

「ぐげっ！」

不意打ちで背後から、リクさんが僕を蹴り退けてきました。

そのままリクさんは町長らしき男性に声を掛けます。

「ゴブリン退治で来ました。依頼をください」

すると男性はすごく笑顔になって、

「おお、君達かい。学校長から話は聞いているよ」

どうやらこの男性が町長で間違いないようです。

僕は地面から起き上がって、町長と話を続けました。

「ゴブリンはどこにいますか？」

「ゴブリンはこの町の外れにある【廃墟の炭鉱所】に住み着いている。彼らはとても凶暴で危険だ。ぜひ頑張って、スーヤの宝石を取り戻してきてほしい。」

旅は過酷なものになるだろう。君達の役に立つかはわからないが、これは私からのささやかなプレゼントだ」

僕は『生命回復剤』と『毒消し草』、『妖精の粉』に『パワー増幅剤』そして『町長の食べかけのアメ』をもらった。

僕は無言で『町長の食べかけのアメ』だけはそつと返した。

そのアイテムはご自分で消費してください。

町長は話を続ける。

「余談ではあるが、私の頭上にある吹き出しの絵なんだが  
僕を押し退けてクレイシスさんが苛立たしく催促する。」

「そんなことはどうでもいい。早くクエスト依頼をしろ」

「どうでもよくねえ！」

「待って！」

僕は慌てて叫び、待ったをかけたが。

町長はにこりと笑って、

「それじゃ、君達の健闘を祈っているよ」

町長の吹き出しの絵が消えて、僕の頭上に【奪還依頼】と金色の文字が現れました。

「嘘だろおおッ！」

僕は町長の服を掴んで泣きわめきました。

「何してんのや？ ヨーイチ」

「行くぞ、ヤマダ」

「ヤマダさん？」

「放置でいいと思うわ」

「ボクたち先に行くからね」

仲間達の呼びかけをよそに、僕は泣きながら町長の服を掴んで激しく上下に揺する。

「頼むから教えて。ほんと本気で教えてください。あの吹き出しのケーキの意味はなんですか？ なんでケーキにしたんですか？」

「……………」

もう、今夜は眠れそうにないです。

三、何かを忘れていませんか？（前書き）

眼鏡変えました。

三、何かを忘れていませんか？

【第三試験】　ゴブリンからスーヤの宝石を奪還せよ。

はい。僕たちは今、廃墟の炭鉱所の前まで来ています。

やはり町長が言っていた通り、廃墟の炭鉱所は多くのゴブリンに占拠されていました。

門番のゴブリンが二人。

その門の出入り口から見回りのゴブリンが何匹も巡回しています。敵の守備は万全です。

もし一匹でも僕らの存在を見つけてしまうと、大勢のゴブリンが一斉に袋叩きに來ます。

大変危険な試験です。

だからといって、僕たちはいつまでもこんなところでウジウジと怖がっているわけにはいきません。

いかなる恐怖や困難があろうと、僕たちは前に進むしかないのです。

問題はどうかやって敵に見つからずに忍び込むか。

僕の力量が試されます。

仲間の安全を確保し、さらに効率良い戦い方をしなければ、パーティは全滅です。

誰かがゴブリンを引きつけてくれればいいのですが……。

……。

みんなの視線が僕に集中します。

「　　って、なんでまた僕！」

さも当然とした顔でクレイシスさんが答えてきます。

「他に誰が居る？」

勇者を何だと思っているんですか。

すると、グランツェが僕に向けて『グッド・ラック』と親指を突き出してきます。

「お前の勇者魂を見せるんや、ヨーチ」

見せるどころか、そのまま昇天していきそうな気がします。

「運良く生き延びればレベルも上がっているはずよ」

リクさん。それ、死を前提にしませんか？

「頑張ってくださいヤマダさん」

「ボクたちがたまに遠目から見守ってあげるから」

どれだけ薄情ですか、あんたたちは。

僕は拳を固めて決意しました。

「よし。ここはみんなで乗り込もう」

そうだ。忘れてはならないのがこの試験の目的。今回の試験はチームワークだ。第二試験とは目的が違う。

僕はみんなを説得する。

「大事なものはチームワークだ。連携でやらないと試験に合格できない。一人でも欠けたらチームワークとは言えないだろう？」

頼むから僕を見捨てないでください。

グランツェが考え込むように頷いて納得します。

「そやな。たしかにヨーチを欠いて俺らだけでクリアするのは無意味や」

見捨てる気だったのかよ、オイ。

クレイシスさんも納得します。

「確かにな。だが……」

再びみんなの視線が僕に集中します。

……。

あーうん。わかるよ？ みんなの言いたいことは。だからこそ！

「僕が先陣きつて敵のアジトに乗り込む。だからみんなは僕の後について来て」

そう。これでこそ勇者だ。

僕は見習いの剣を構えると、第一声の雄たけびを上げて駆け出しました。

後続してみんながついて来てくれます。

恐れをなしたのか、ゴブリンが動きを止めてその場に固まります。よっしゃ！ この勢いのまま敵陣になだれ込みだあー！

と、その時です。

ガン！

僕は敵のアジトを目前にして、見えない壁に思いっきり顔面を強打しました。

後続していたみんなは、それを見て足を止めます。ずりずりと。

見えない壁と豪快にキスしたまま、僕は滑り落ちて地面に倒れました。

背後でグランツエが感心します。

「流石やな、ヨーイチ」

ウララちゃんが僕に駆け寄り泣きつきます。

「死んだらダメです、ヤマダさん！ 私まだヤマダさんに『好き』って告白してないんです！ 死んだら告白できないじゃないですか！」

いや、あの……死んでないです。

ラウル君が僕の体を棒先でツンツンと突きながら心配そうに様子をつかがいます。



「すごい自己犠牲精神だね、ヤマダ君」

リクさんが冷めた口調で、

「勇者が戦闘前から戦闘不能になるなんて聞いたことないわ。どうする？ 兄さん」

いや、あの……僕を勝手に戦闘枠から外さないでください。

すると返らぬ言葉に、リクさんが不安そうにもう一度、クレイシスさんに尋ねます。

「兄さん……？」

クレイシスさんは怖い顔をしたまま、見えない壁に手を当てました。

しばらくしてフツと微笑します。

「この白魔法の結界技　アイツの仕業か。いつ見ても間抜けな出来だな」

「『間抜けな出来』とは聞き捨てならないな」

声は廃墟の炭鉱所から聞こえてきました。

向かってくる大勢のゴブリンを白魔法でフリーズし、その場に固めて、男は姿を現します。

あの時汽車の中で出会った魔法使いの男でした。

魔法使いの男はクレイシスさんに向けて言います。

「所詮貴様の魔法は魔王城で身につけた黒魔法。外道の貴様にこの高貴な白魔法は理解できまい」

クレイシスさんが鼻で笑います。

「黒魔法を学んで何が悪い？ お前の白魔法を見る度、つくづく黒魔法を学んで良かったと思えるな」

「言わせておけば貴様……！」

魔法使いの男は憎々しげに表情を歪め、拳を握ります。

苛立つ魔法使いの男の背後からもう一人、見覚えのある男がこち

らに向かって歩いてきます。

白いスーツに胸ポケットにバラを挿した　あの時汽車の中で出会った金持ちの勇者です。

「ルーキー相手にマジ喧嘩かい？　格下に見られるからやめてくれよ。ボクちんの面目丸つぶれじゃないか」

勇者の言葉に、魔法使いの男はしぶしぶ怒りを静めます。

「……わかったよ、<sup>リーダー</sup>カス勇者」

「ボクちんの気のせいかな？　今ルビで何かをごまかさなかったかい？」

「気のせいだよ<sup>リーダー</sup>アホ勇者」

「いや今のも絶対ルビで本心ごまかしたよね？」

魔法使いの男は勇者を無視してクレイシスさんに指を突きつけます。

「そついうわけで俺と勝負しろ。黒魔道師クレイシス」

どういうわけか全く分かりません。

クレイシスさんが鼻で笑います。

「試験の邪魔する気か？　面白い。望むところだ」

いやあの……。

これって僕が主人公として決めるべきセリフだよね？

### 三、何かを忘れていませんか？（後書き）

ふざけました。ごめんなさい。

タイトル変えました。

勢いで中身も変更しました。

ますますファンタジーになりました。

どうにもならなくなりました。

だから次いでにジャンルもファンタジーに変えようかと思いましたが、シリアスになりそうなのでコメディーのままにしました。

コメディーだと話が区切りやすいという単なる我がまま。

……それだけ。

三、なぜか僕には敵が居ない。

貴族勇者は髪を爽やかにかき上げて言ってきた。

「やれやれ。どうやらボクちゃんも戦わなければいけない雰囲気になったようだね」

面倒くさいと言わんばかりにため息を吐く。

向こうが出るなら僕も負けてはいられません。

僕は立ち上がり、見習いの剣を構えました。

「面倒くさいのは僕も一緒だ」

貴族勇者は馬鹿にするように笑った。高級そうなロングソードを抜き放ち、その剣先を僕に向けて言う。

「面倒くさいだって？ 見習い勇者はよく吠える。負け犬の遠吠えってやつかい？」

なんかほんと、心の底から面倒くさい相手です。  
すると僕を庇<sup>かば</sup>うような形でグランツェが大剣を抜き放って前に進み出てきました。剣先をカッコ良く、貴族勇者に突きつけて言います。

「そっけなのは俺らのような雑魚を倒してから言っんな」

仲間想いのそのセリフ、感動ものです。

しかし。

「ヨーイチの実力なめんなや。こっけい見えてもこのチーム最強の実力を秘めてんやからな」

はい、脅しはその辺でストップです。

するとウララちゃんも僕の前に立ちふさがり、

「そうです。ヤマダさんを馬鹿にするなら私たちが相手になります」

あのおく、ウララちゃん……。

ラウル君も拳手をして、

「あ、じゃあボクも」

ノリで参戦するのは止めてください。

次いでリクさんも魔弾銃を手に進み出る。

「なんだか面白そうね」

え？ 今、面白そうって言ったよね？ 完全にノリの勢いだよね？ それ。

クレイシスさんがトドメの一言。

「弱者に用は無い。去れ」

ちよつと待て！ それだと完全に無敵キャラ状態だよ、僕！ 負  
けられない雰囲気になってんじゃない！

貴族勇者の表情が一変します。

「弱者かどうかは戦ってから言ってもらいたいものだね」  
敵の白魔法使いと貴族勇者が戦闘態勢に入りました。

こちらにも、僕を除く全員が戦闘態勢に入ります。

って。

「何もできないじゃん、僕！」

「ヤマダ」

クレイシスさんに呼ばれ、僕は顔を向けます。

「勇者なら仲間を信じるべきだ」

「そや。コイツの言う通りや、ヨーイチ」

「私たちが全力でカバーします。安心してください、ヤマダさん」

「あとで二十人前の弁当おごってね、ヤマダ君」

「貸し、一つだから」

「みんな……」

後半は違う意味で泣けてきます。

クレイシスさんが僕にラッピングの箱を手渡してきました。

あ。これはあの時クレイシスさんが駅で買ったオセロゲーム……。  
だけどなぜ今？

「それをお前にやる」

「え？」

いやあの、これゲームなんですけど。ただのゲームなんですけど。

「お前はそれで存分に戦え」

何気に戦力外通告していませんか？ クレイシスさん。

### 三、なぜか僕らに敵は居ない。

あーどうも。見習い勇者の山田洋一です。

みんなが向こうで頑張って戦っています。

え？ 僕ですか？

僕は今、一人さみしく隅っこにうずくまってオセロゲームのラッピングを取っています。

戦闘？ そんなの知りませんよ。

どうせ戦力外通告なんですから。

僕はようやくラッピングをはがし、オセロゲームを取り出すことに成功しました。

二つ折りにされた基盤を広げて地面に置いて、僕は首を傾げました。

「ん？」

なぜか基盤のマス目はすでに、ところどころが白か黒の定石で埋まっています。

「なんでだ？」

しばらく見ていると、黒の定石が動き出しました。

ちよつと待って、これ……。

僕はみんなに目を向けて人数を数え、敵の人数も数えて、そして

「ってこれヤバくね？ 人数ぴったりじゃん！ リアルゲームかよッ！」

まさか勝つまで終われないとか、そんなゲームじゃないよね？

これ。

すると黒の定石が二つ白の定石に挟まれてしまいました。

戦線に目を向ければラウル君が二匹のゴブリンに挟まれています。

黒の定石が白の定石へと変わります。

途端にラウル君が僕に向けてゴブリンを投げつけてきました。

「ぶっ！」

飛んできたゴブリンを正面から受けて、僕は折り重なるようにしてゴブリンとともに吹っ飛びました。

気絶したゴブリンを退けて、僕はボロボロの体で地面を這いずりながら元の場所へと帰ります。

ラウル君が悪気ない笑顔で明るく手を振っています。

「ごめんね、ヤマダ君。なんか急にヤマダ君が敵に見えちゃって」  
そ、そういうことなのか。

僕はようやく地面に広げていたオセロゲームの所に帰ってきました。

合わせるように基盤外に吹っ飛ばされていた黒の定石が、震えながらマス目のところに戻ってきます。

ああ、この黒の定石が僕なのか。

要するに黒の定石が白の定石に挟まれたり囲まれたりして反転したら、味方が敵になるってことか。

僕は定石の色と位置を確認します。

よし。まだみんな大丈夫。

キュン。

僕の頬をかすめて、魔弾が飛んできました。

「……………」

僕が驚き目で固まっていると、リクさんが真顔で謝ってきます。

「なんだか急に敵意が込み上げてきたの」

リクさん。あなたの色、思いつきり黒です。

そんな時でした。

「うわああ！」

グランツェがゴブリンに背後をとられて挟まれてしまいました。

「グランツェ！」



僕が心配に叫んだ途端、急にグランツェがゴブリンを目の前にして武器を落とします。

戦々恐々とした顔で地面に崩れ折れ、両手を顔に当ててナヨナヨと泣き始めました。

「なんでそんな俺ばかりイジめるんや。ひどいやろ。泣いちゃう」「グランツェ！」

「なんてこった！ 反転しただけでキャラ崩壊するといつか！？」  
「きゃああー！」

黒の定石が白の定石に囲まれています。

「って、今更だけど多くないか？ 白の定石。」

囲まれたのはウララちゃんでした。

ウララちゃんの黒の定石が白の定石に変わります。

「ウララちゃん！」

僕は心配に叫びました。

するとウララちゃんが急に暗く俯き、髪に結んでいたゴムを取りました。

ぱさりと、ウェーブがかかった長い髪が色っぽくウララちゃんの顔に流れ落ちてきます。

「おお……」

僕はなんだかドキドキするような鼓動を感じました。

ウララちゃんはかけていた眼鏡を外し、戦意に満ちた勇ましい顔を上げて、そして

いきなり怒涛のごとく吼えます。

「さっきからうざってえんだよ、てめえら！」

ビリビリとした空気がみんなを一瞬で凍らせました。

ウララちゃんは魔法の杖を地面に突き立てると、難しそうな魔法を描き始めます。

魔法陣が完成したようです。

ウララちゃんは悪魔のような笑みを浮かべて言いました。

「出でよ、ドラゴン」

完成した魔法陣が巨大化し、大勢のゴブリンが地面の中に引きずり込まれていきました。

ゾツとする光景です。

全てのゴブリンを地面の底に引き込んだ後、まっさらな大地となった場所に一人佇み、ウララちゃんはフツと鼻で笑います。

「線一本間違えて全員地獄に墮としちゃった」

怖ええええよッ！ ウララちゃん！

僕とラウル君でウララちゃんのところに駆け寄ってウララちゃんを元の色に戻します。

ウララちゃんはまるで夢でも見ていたかのように、きょとんとした顔で両手を目に当てる。

「あれ？ あれれ？ 眼鏡眼鏡……」

良かった。元に戻ってくれたあ。     ってその髪型可愛すぎるよ、ウララちゃん！

地面を手探りするウララちゃんに、僕は側に落ちていた眼鏡を拾ってウララちゃんに差し出す。

眼鏡をかけてウララちゃん。僕を見つめてにこりと笑う。

「ありがとうございます、ヤマダさん」

その後グランツェにも駆け寄り、元のグランツェに戻します。

「お？ ヨーイチ。どうしたんや？」

残る敵は二人。

貴族勇者と白魔法使いの男です。

僕はウララちゃんとラウル君、グランツェ、リクさんを引き連れて駆け寄ります。

すると二人と対峙していたクレイシスさんが急に怒鳴ってきました。

「馬鹿！ 来るなヤマダ！」

「あ」

気付いたが、すでに遅し。

基盤の定石が全て黒になったのは言うまでもありません。

#### 四、冷やし中華始めました。

風に揺らめく黒い髪。

着物姿のとても似合うその少女は、手に持っていたピンクの封筒を胸に抱き、「ほう」と静かに息を吐く。

「これが恋というものですね」

少女はひとしきり自分に酔いしれた後、行動に出る。

目前にある靴箱のフタを上品な仕草で開ける。

そこから香りくるスーティな刺激臭。

思わず二つ指で鼻をつまむ。

そして、さきほどまで抱きしめた封筒をそつと靴の上に置くと、何事もなかったかのように優しくフタを閉じた。

ほう。

少女は息を吐いて、両手を心の臓へと当てる。

ドキドキ、ドキドキ……。

恋というものは突然始まるものです。

冷やし中華もそう。

偶然入った食事処で、ふと壁にぶら下がったメニュー板へと目をやると、いつの間にか『冷やし中華』が仲間に入っている。

本当はおソバを食べに来たはずだったのに……。

ああ、なぜわたくしはこんなにも冷やし中華というものに惹かれるのでしょうか。

目移りしてはいけない。

でも気になるのです。

この高鳴る気持ちは偶然でしょうか。

いいえ、運命です。

わたくしと彼はいつかこうやって出会う運命にあったのです。

少女はその靴箱に想いを寄せ、仄かに頬を染める。

まるでその人物がそこに居るかのように、

「そうですよね？ 山田洋一さま」

#### 四、じゅげむ・じゅげむ……。

クレイシスさんが珍しく、僕の教室にやってきました。

「ヤマダ。ちよつと来い」

何かあったのでしょうか。

僕は理由もわからず廊下に呼び出され、クレイシスさんと向き合います。

「第四試験はまだですけど」

「わかつている。リクからお前に渡すよう頼まれたんだ」

そう言つて、クレイシスさんは僕にピンクの封筒を渡してきました。

僕はドキドキしながらその封筒を受け取ります。

え？ これつてもしかしてラブ・レ

「勘違いするな。お前が弟になるなどあり得ないし、考えたくもない」

どんな全力否定ですか？ それ。

「リクも頼まれたんだ。『ヤマダに渡してくれ』とな。だがこの手紙を魔弾とともにヤマダに送ったところで」

なんで魔弾もセツトなんですか？

「眉間でしか受け止められないだろうからと」

なんで撃ち込み限定なんですか？

「オレがお前にこの手紙を渡すことになったんだ。だからオレの妹に好意を抱くのはやめろ」

「どういう流れでそうなるんですか？」

急にクレイシスさんが考え始めました。顎に手を当てぶつぶつと呟きます。

「そついえばこの手紙、ものすごく人伝いで流れてきているな」

「え？ これ、誰からどのようにココに流れてきているんですか？」

「リックは武器防具のエメリアからこの手紙を頼まれたんだが、エメリアはスペクトルという男子生徒から頼まれて受け取った。だがスペクトルはアルゲルマという男子生徒から『コイツ知らないか?』と受けて、アルゲルマはイリンドという元カノからこの手紙を預かって、イリンドはハルカという女子生徒からこの手紙を受け取って、そのハルカという女子生徒はイトウという男子生徒からこの手紙を受け取って、そのイトウはアセルスという男友達から受け取って、アセルスはファムという男友達から」

「もういいです。クレイシスさん」

「結論でいえば『コイツ誰?』だ」

「ただ影薄いんですか、僕は。」

「そんな時でした。」

「おー、ヨーチ。こんなところで何してんのや?」

「グランツェが廊下の向こうからやってきました。」

「すぐにグランツェの視線がクレイシスさんへと流れます。」

「何してんのや? 魔道師」

「クレイシスさんが素っ気無く答えます。」

「正確に言えば元・魔道師だ。だからいつものように魔法使いでいい」

「どーでもええやろ。こんなところで何してんのや? 魔法使いはあ。」

「クレイシスさんが疲れたようにため息を吐いて答えます。」

「また一からあの流れを説明しないといけないのか」

「なんのことや?」

「結論を言えば『リックエメリアスペクトル、アルゲルマ、イリンドハルカ、イトウアセルスファム』」

「何の呪文や？ 魔法使い」

「ヤマダ。説明してやれ」

「え？ なんで僕が？」



四、それってヤバくないですか？

僕は教員室に呼び出されました。

カルロウ教師のお告げです。

「山田。第四試験は護衛だ」

僕は元気良く手を挙げて質問しました。

「はい、先生」

「どうした？ 山田」

「誰をどこにどのように護衛ですか？」

「いい質問だ、山田」

「いえ普通です」

「アップリナ大公の娘　イリア嬢が隣国でサマー・ライブを決行するそうだ。その会場までの護衛だ」

「先生。突っ込みどころが多すぎます」

「そこは流せ、山田」

「では先生。とりあえず彼女についていつてあげればいいんですね  
カルロウ教師は僕の肩にぽんと手を置いて同情します。

「頑張れ、山田。これを持ち切ればきっと良い事があるはずだ」

「先生。すごく嫌な予感がします」

「気のせいだ、山田。道は辛く険しい。どんな敵が現れようと気を  
しっかり持て」

「え？　ただ汽車に乗ってついでにいくだけですよね？」

「馬鹿言うな、山田。乗り物は汽車じゃなく馬車だ。イリア嬢は馬  
車がお気に入りだ。汽車ならば民間の護衛企業も断っていない」

「ただだけデンジャラスな冒険させる気ですか？」

「ちなみにこれができれば進級だ。お前が断るならば他の勇者志願  
者に頼むが？」

「やります、先生」

よし。すぐに作戦会議を開こう。

イリア嬢にはなんとしてでも汽車に乗っていただくんだ。

四、僕は何かを忘れている。(前書き)

お気に入り登録してください、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

#### 四、僕は何かを忘れている。

はい、恒例の作戦会議です。  
議題はもちろん

「どうすれば【いりあサマーツアー・inあるこにあ】のプレミアムチケットが取れるのか、だ」

違います。

そして顔が近いです、クレイシスさん。

「お前は気にならないのか？ ヤマダ」

たしかにそれは僕もすごく気になっていました。

アップリナ大公のイリア嬢といえば、全世界が注目する歌って踊れるトップ・アイドル。和服の似合う黒髪美少女。清楚な印象と愛らしい子犬のような瞳が、すごく萌

「ヤマダさん！」

「はい、ごめんなさい！」

ウララちゃんの怒りの声に、僕は土下座で謝る。

いや、別に悪いことしているわけじゃないんだけど、なぜだろう？

僕は身を起こして咳払いする。

「とにかく、今は彼女を安全に現地に届ける為の作戦を考えるんだ」  
ダン！ と、グランツェが僕の前にある机を叩いて迫ってきました。

「きつとそいつは偽モンや、ヨーイチ」

「え？」

「あのイリりんが俺らに護衛を頼むはずがないやろ」

「ま、まあたしかにそうだけど……」

「お前はカルロウ教師に騙されたんや」

どちらかといえばそっちの方が、僕としては気が楽です。

あーいや、でもほんのちょっとくらいはそんな奇跡の出会いを  
「ヤマダさん！」

「はい、ごめんなさい！ 真面目にやります！」

僕は反射的に土下座で謝った。

ふと、クレイシスさんが何かに気付き考え込みます。

「偽者か……」

「え？」

僕は顔を上げてクレイシスさんに問い返しました。

クレイシスさんが言葉を続けます。

「もしかしたらファンの目をこっちに引きつけておいて、本人は汽車で現地へ行く。      ということも考えられる」

そうか！

僕はその言葉にピンときた。

試験の目的はそういうことだったのか！

「さすがクレイシスさん！      ありがとうございます！」

「は？」

呆然とするクレイシスさんの手を僕は感激しながら掴んだ。

勇者として、僕はそういう裏設定に気付かなければならなかったんだ。

大事なモノを守れてこそ勇者。

もし村に魔物が襲ってきたら僕達は魔物を村の外へと誘導し、村の安全を守らなければならない。

教科書は七百三十六ページ。護衛法第三十二条      村の安全と保護より抜粋。

僕は燃えてきた。拳をぐつと固める。

「よおーし！      じゃあ僕達は全力でファンをこっちに誘導し、偽イリア嬢と本物のイリア嬢の身の安全を守ってみせるんだ！」

ウララちゃんが僕の姿に感動し、目を潤ませる。

「カッコイイです、ヤマダさん！」

クレイシスさんが危険な笑みを浮かべます。

「誘導後は任せるヤマダ。黒魔法を全力で叩き込んでやる」

その時は全力で止めさせていただきます。

「俺もや、ヨーイチ。新技連発してやる」

「私も頑張ります、ヤマダさん！ 魔界からたくさんの魔物を召喚してヤマダさんをサポートします！」

「……」

僕はテンションを落とした。重い影を背負って頂垂れる。

「ごめん、みんな。普通にやろうよ。このままじゃ僕達、進級どころか人生の道を踏み外していきそうだ」

クレイシスさんが僕の肩にポンと手を置いて励まします。

「魔王も最初はそう言っていた」

僕はその時気付きました。

本当に守るべきものはファンの方々の安全なのかもしれない、と。

#### 四、いいかげんにしろよ、コラ！

はい。僕達は今、待ち合わせ場所である【パントテン町の三番街  
停留所】にきています。

意外に学校のすぐ近くです。

今回はイリア嬢の護衛ということで、みんなすぐに集まってくれました。

「　　って、なんか仲間が増えてね？」

何の怪奇現象が起こったのでしょうか。

僕は目をこすって、もう一度指で人数を確認してみます。

クレイシスさん、グランツェ、ウララちゃん、リクさん、それと

「なんで居るの？」

僕は第三試験で出会った貴族勇者と白魔法使いの人に尋ねました。  
貴族勇者がお手上げて僕に言います。

「Why? なぜそんなことを聞く? 僕ちゃんは君達の仲間じゃないか」

「俺たちを仲間にしたのはお前だ、新人勇者<sup>ルキ</sup>ヤマダ」

え? まさかあのオセロゲームの呪いはまだ続いていたんですか?

僕はクレイシスさんに視線を向けます。

するとクレイシスさんは肩をすくめてお手上げしました。

「あのゲームなら昨日リサイクルショップに売った」

そんな危険な物を市場に流さないでください。

「魔法の効力も切れていたしな。ただのゲームに成り果てたから問題ない」

僕たちには問題大有りです、クレイシスさん。

ウララちゃんが僕に言います。

「いいじゃないですか、ヤマダさん。仲間がたくさんいた方が楽しいですよ」

「そや、ヨーイチ。このままでええやんか」

しかし、リクさんだけが僕に魔弾銃を突きつけて怖い顔で言います。

「一つのパーティに勇者は二人もいない」

「えええっ！」

僕は慌てました。

貴族勇者が割って入ります。

「僕ちんの為に争わないでくれよ。僕ちんはみんなの物だ」

「黙れ、お前。黒魔法を全力でぶち込むぞ」

「落ち着けや、魔法使い」

貴族勇者に殺気向けるクレイシスさんをグランツエが慌てて止めます。

すると白魔法使いの人がクレイシスさんの前に立ちふさがりました。喧嘩腰で指の関節を鳴らしながら、

「そつえば魔法使いも一つのパーティに二人いないな。特に黒魔道師、貴様は論外だ」

「上等だ。ここでケリをつけよう」

「まあまあ落ち着けや、魔法使……魔法使いのお二人さん」  
グランツエの一言が、さらに二人の闘志をあおります。

ウララちゃんが泣きそうになって、

「もう喧嘩は止めて下さい！ 私、私……」

語尾を涙でくもらせて、ウララちゃんはどうとう泣きだしてしまいました。

リクさんが銃口を下ろして、僕に指を突きつけてきます。

「お前が泣かせた」

「え！ なんて僕！？」

啞然とする僕の隣で、貴族勇者が独り舞台を踊ります。



「ああ泣かないでくれ、子猫ちゃん。僕ちゃんはみんなの物だ」

「勝負は三分といこう。問題あるか？ 黒魔道師」

「ない。一秒で終わらせる」

「白も黒も喧嘩すんなや。魔法使いは二人でええやろ？」

クレイシスさんがグランツェにきっぱりと言い放ちます。

「オレは黒魔法が使える白魔法使いだ。白魔法使いは一つのパーティに二人もいない」

白魔法使いの人も頷きます。

「そうだ。二人もいない」

グランツェが雰囲気には圧されて身を引きます。

「ほんなら存分に戦えや。二人とも」

それを合図に二人の魔法使いは白魔法を手中に出現させました。

「回復魔法で勝負だ、黒魔道師！」

「望むところだ！」

二人同時に魔法を放ち、お互いに回復魔法をかけ合います。

グランツェが頬を引きつらせて、ぼそりと。

「アホや、アイツ等……」

そんな彼らをよそに、僕は貴族勇者にこのパーティから脱退してもらおうと申し出ました。

「たしかにリクさんの言う通り、パーティに勇者は二人もいない。これ以上は喧嘩の原因にもなるし、できれば」

貴族勇者がきょんとした顔で首を傾げます。

「僕ちゃんは勇者を名乗るつもりはないよ」

「え？」

そう告げると、貴族勇者は腰に装備していた剣を抜き放ちます。剣の刃に軽くキスをし、

「僕ちゃんの得意技は剣の舞。だから僕ちゃんは剣士を名乗るよ」

「上等や、コラ！」

グランツェが大剣を抜き放って構えます。

「わああ！ 待ってグランツェ！」

僕は慌ててグランツェを止めに入ります。

このままではパーティ崩壊どころか依頼人に迷惑をかけてしまう。依頼人はあのアップリナ大公の娘だ。こんな雰囲気を見せて『頼りない』と思われたら、噂が広まって今後一切どこからも依頼がもらえなくなる。

僕は決死の覚悟に出ました。

「みんな、とりあえず落ち着いて！ 僕の話聞いて！」

喧嘩は止まり、みんなが僕に注目します。

僕は言いました。

「こうしよう。僕達は小規模パーティを組んだ。みんなで協力し合って一つの依頼を達成させるんだ。これならいがみ合う理由なんてないはずだろう？」

みんなが僕の意見に納得します。

争いが収まり、パーティは再び穏やかな雰囲気を取り戻しました。

うん、これでよし。

なんか今日の僕はすごく輝いている。

するとリクさんが、また僕に指を突きつけ言いました。

「パーティに弱者はいらない」

以下、振り出しに戻る。

「……………」

僕はがく然と地面にひざを折って頂垂れました。

もういいかげんにしてくれ。

そんな時でした。

一台の大型馬車が僕達の前で停車しました。

#### 四、おっと。遊びはそこまでだ。

##### 【第四試験】 イリア嬢の護衛。

馬車から出てきたのは、なんとあのイリア嬢でした。  
イリア嬢は馬車から降りてくるなり、いきなり僕に抱きついてきました。

「ヤマダ様。イリアはずっとヤマダ様にお会いしようございました」  
「ええええ！」

いきなりのことに、僕はわけわからず驚きました。  
ウララちゃんの目が殺気立ち、魔法の杖を構えます。  
リクさんが魔弾銃を構えて僕に狙いを定めます。

グランツェが大剣を抜き放って僕を睨み、貴族勇者も剣を抜き放ち構えます。白魔法使いさんは光魔法を詠唱し始め、クレイシスさんの手中にはどす黒い闇の魔法が生まれ

「ちょ、ちよつと待って！」

僕は慌てて両手を振り、みんなの誤解を解こうとしました。

「何かがおかしいよ！ 彼女が本物のはずがない！」

するとイリア嬢はきょとんとした顔で僕を見つめて不思議そうに小首を傾げてきます。

「イリアは本物でございます。今回の依頼のこと、学校からお聞きになったのでは？」

僕は答える。

「護衛の話ですね？」

「はい」

「僕たちで本当にいいんですか？」

「あなた方はけして誰も受けないような過酷なクエストをも絶対に

断れないパーティだと聞いています」

それ、ただだけ将来崖っぷちパーティですか。

僕は念のために尋ねます。

「あの、今回の護衛内容を一応確認しておきたいんですけど。

護衛というのはファンの方々からあなたの身を守ればいいんですよね？」

「いえ、違います」

え……？

「ファンなら誰もがこのことを知っています。だから今もこうしてイリアには誰も近づかないんです。イリアは必ずライブ前にオリジナルの歌を作ります」

「あー、あの毎年やる予定にないオリジナルの歌だね」

「はい。あれ全部本番前にイリアが即興で作っているんです。今回はラブ・バラードを作ろうと思っています。敵に捕まった姫を勇者が助けに行く、そんな切ない気持ちをイリアは歌いたいんです」

なんだか嫌な予感がしてきました。

イリア嬢は話を続けます。

「ダンジョンで強い敵と戦いながら、勇者は数少ない仲間たちと力を合わせて姫を助けに行く。それを見ている姫の切ない気持ちをイリアは歌いたいです。想像だけでは歌は歌えません。だからイリアは身をもってこれを体験するのです」

「もしかしてそれ、実践でやろうとしてる？」

「はい」

「……」

僕はこの時になってようやく察しました。

なぜみんな、ライブ前の彼女を避けるのか。そしてなぜ、誰もが彼女の護衛を断るのかを。

呆ける僕を見て、イリア嬢は何を勘違いしてか感謝を言います。

「この歌に相応しい勇者はヤマダ様以外に居ません。イリアは勇気を振り絞って【ギガ・ダンジョンへの通行証】を手に入れてきまし

た。もしかしたら最悪な事態が起こってしまうかもしれません……。

でもこれも全てライブを成功させる為！

さあ。勇気を出して行きましょう、ヤマダ様」

「……」

クレイシスさんがぼんと僕の肩に手を置きます。

「今からでも遅くはない、ヤマダ。お前は手記を遺しておけ。オレは絶対に死なない自信があるけどな」

グランツエが楽しそうに興奮します。

「ダンジョンや、ヨーイチ！ ダンジョンといえば死人や！<sup>マントレット</sup>これ  
で経験値が大量に稼げる！」

白魔法使いさんと貴族勇者があっさりパーティから離脱します。

「ごめん。なんか急に魔法の調子が」

「あ。もうこんな時間だ」

ウララちゃんが僕の前に来て力んだ顔で言います。

「ヤマダさん！ 私、ヤマダさんがアンデットになったら必ず現世  
に呼び戻してみせます！ たとえヤマダさんの肉体がボロボロにな  
っていたとしても、私だけはヤマダさんのこと」

リクさんが改めて僕に向けて魔弾銃を構えます。ぼそりと、

「……今のうちに逝つとく？」

「なんで僕だけアンデット化！？ なんで歌を作る為だけにギガ・  
ダンジョン！？ 魔王だつてそんな目的でダンジョン管理している  
わけじゃないと思うよ！」

声を荒げる僕に対し、みんなの反応はとても落ち着いていた。

リクさんがクレイシスさんに尋ねます。

「……そこんこの事情つてどうなの？ 兄さん」

クレイシスさんが肩をすくめてお手上げします。

「魔王だつてダンジョンに客が来なかったら経営する意味ないだろ」  
「もはや勇者は客扱いッ！？」

どうやらダンジョンとは、僕が想像している以上にとんでも客寄

セアトラクションのようです。

四、てめえら、マジでいいかげんにしろ！

気合い入れて乗り込んだギガ・ダンジョン。

古びた城を魔物が乗っ取ったそのダンジョンは、今はものすごく…… なんとというか、本当にものすごくかわいそうなぐらい破壊された状態になっていました。

「何があつた？」

クレイシスさんが近くの墓標に問い掛けます。

って、ちょ、クレイシスさん？

するとその問い掛けに、墓標の下から顔だけ出して子供ゾンビが可愛い声で答えます。

「勇者にやられたですう」

隣の墓から母親ゾンビが顔を出します。

「このダンジョンはほぼ壊滅状態です」

次いでゾンビA、ゾンビB。

「クレイシス様。どうか我々をお助けください」

「次に勇者が来れば我々の命はありません」

「そうか……」

納得し、肩を落とすクレイシスさんに僕は冷静にツツコミを入れ

ます。

「あの、クレイシスさん？ 彼らの言う『次に勇者』というのが僕たちなんですけど」

「そうだな」

敵に『勇者御一行』と思われていない僕たちっていったい……。

「そやけど、ほんまにやるんか？ ヨーイチ」

グランツェがぼろぼろになった城を見つめて呟きます。

……いや、それ言ったらスゲー悪者じゃん、僕ら。

ウララちゃんも泣きそうになって僕に訴えます。

「ヤマダさんはそんな非情な人じゃないはずです！」

い、言っとくけどゾンビは敵だからね？ ウララちゃん。

でもそうは思うものの、僕だって弱っている敵に戦いを挑むのもどうかと考え直します。

イリア嬢がほんのりと頬を染め、僕に言います。

「ヤマダ様にさらわれるという設定もむしろアリだと思います」

いや、本気で待って。それはそれで何かが間違っているよ。

僕はイリア嬢に説得を試みます。

「もうこの際ギガ・ダンジョンは諦めて汽車で現地に移動しません



か？ その間でもラブ・バラードを作ることにはできるはずです。僕たちも協力しますから」

リクさんが僕に向けて魔弾銃を構えます。

「『HIREN。届かなかったジュリエットの想い』っていうのはどお？」

そこは明るめのラブ・バラードをお願いします。

僕は向けられた銃口を静かに横に退け、イリア嬢に説得を続けま  
す。

「このままだとライブの時間にも間に合わなくなるし、できればも  
っとこう、効率的に」

と、その時です。

勇ましい足音とともにこちらに大勢の団体さんがやってきました。

……なんだかすごく嫌な予感がします。

その団体さんは全員重装備に身を包み、頭にハチマキ、そしてレ  
ベル高そうな武器を片手に怖い顔をして向かってきていました。

ハチマキに書かれた『イリア命』。

掲げた旗に『天誅』の文字。

先頭を歩く人物に、僕たちは見覚えがありました。

貴族勇者と白魔法使いさんです。その後ろに従えているのはイリ  
ア嬢ファンクラブの皆さんなのでしよう。

二人は僕たちを指差して叫びます。

「あそこに居る見習い勇者が依頼に託<sup>かこつ</sup>けて我等のイリりんを誘拐し、独占している！」

二人の背後にいた彼ら　イリア嬢ファンクラブの皆さんは、その声に賛同し、地を唸らすように僕に向けて罵声を浴びせてきます。

なんてこった！

僕は頭を抱えました。

やはりあの時依頼を知っている二人をメンバーから外すべきではなかった！

『依頼は絶対他人に教えないようにしましょう』

先生が授業で言っていた教訓が今頃になって脳裏を過ぎります。

「ど、ど、どうしよう……！」

こんなパニック状態の頭では最良の解決策が浮かんできません。でもここはリーダーの僕がしっかりしないと！

ウララちゃんの表情に怒りが走ります。ぎゅっと手中の杖を握り締めて、

「あんな言い方酷すぎます。ヤマダさんはそんな人じゃありません。私が行って説明してきます」

「ダメだよ、ウララちゃん」

僕はウララちゃんを止めた。

そうだ。ウララちゃんを一人で行かせるのは危険すぎる。群がる狼どもの中に子ウサギを入れるようなものだ。

けど、だからといって僕やクレイシスさん、グランツエと一緒に行けば逆効果に過ぎない。

こんな時にラウル君が居れば……！

もうここで頼れるのはリクさんしかない。

僕は視線でリクさんに助けを求めました。

その視線にリクさんが応えて頷きます。

魔弾銃を構えて、

「　　ってちよつと待って！　それやつちゃうと僕たち思いっきり敵側になるから！」

慌てふためく僕とは裏腹に、クレイシスさんとグランツエが好戦的な笑みを浮べます。

グランツエが指の関節を鳴らしながら、

「敵側上等やコラ」

「どうやら奴等を潰すしか他に方法はないようだな」

「お？　奇遇やな、ボケ魔法使い。ココに来てようやく俺たち意見がおつたな」

「『ボケ』は余計だイカレ剣士。足引つ張るなよ」

「『イカレ』は余計やボケ魔法使い」

僕はひくひくと頬を引きつらせながらクレイシスさんに言います。

「あの、クレイシスさん？」

「なんだ？」

「潰す以外にも友好、安全、逃走の選択肢が　　」

「　潰す」

速攻コマンド選択！？

「そや、ヨーイチ。ガンガン行こうや」

なんであんな等そんなに乗り気なんですか？

グランツエとクレイシスさんが一斉に懷からゴールドカードを取り出して僕に見せます。

「理由は単純だ、ヤマダ」

「俺らはいいつ等を潰してイリリンのライブチケットの先行予約順位を勝ち取りたいだけや」

その力は正義のためだけに行使してください。

「そういうことでヤマダ」

「ここは俺らに任せろや」

任せられません。

「アイツ等はオレ達で引き受ける」

「先に行けや、ヨーイチ」

先に？

二人の視線が一緒になってギガ・ダンジョンに向きます。

これって予感的中でしょうか？

「ヤマダ。お前はあの城の最上階でウララとイリア嬢を連れて避難してろ」

いや、あの、クレイシスさん。僕たちは一応……

いつまでも動かない僕に向けて、クレイシスさんが手中に黒魔法を生み出しながら苛立つように言葉を続けます。

「ここを一掃する。オレの術に巻き込まれたいのか？」

手加減無用の無差別攻撃！？

「そやヨーイチ。アイツ等に時間を取られてイリりんがライブに間に合わなければ試験は不合格や」

そ、そこを言われると何とも……。

クレイシスさんがてきばきと指示を出します。

「リク、お前は念のために城の中層階を守れ」

「わかったわ、兄さん」

するとゾンビA→Zまでがクレイシスさんのところに這い寄って来て、

「俺たちも戦うゾナー」

「おらたちも仲間の敵討ちやるだあ」

「打倒勇者だがやー」

その言葉になぜかウララちゃんが感動して、

「私もゾンビさんと一緒に戦います！ 打倒勇者です！」

う、ウララちゃん！？

驚く僕に気付いたのか、ウララちゃんがハツとしたような顔で僕を見た後、慌てふためきながらさきほどの言葉を訂正します。

「あ、あの、ヤマダさんのことじゃないですからね。たしかにヤマ

ダさんは勇者ですけど、悪い勇者を打倒なんです」

そういう問題じゃないよ、ウララちゃん！

その間にもクレイシスさんがゾンビたちに守備を指示します。

「よし。じゃあ体格のかい象さんチームは右だ。白か黒かよくわからないパンダさんチームは中央、行動の遅い残りのカメさんチームは左だ」

なんで運動会的な配置！？

「あの、クレイシスさん」

「なんだ？」

「一応僕たちは勇者側の」

「ヤマダ、お前の担当は城の最上階だ」

「そうじゃなくて僕たちは勇者側の」

「ヤマダさん、こっちです」

言葉半ばでウララちゃんが僕の片腕を掴んで連れて行きます。

「そ、そうじゃなくてウララちゃん、聞いてる！？」

遅れてイリア嬢も僕の片腕にしがみついてきます。

「ヤマダ様、イリアも依頼人としてあなたのお傍に居ます！」

反対側の片腕にいたウララちゃんが怒ります。

「ヤマダさんの傍に相応しいのは私です！」

「違います！ イリアです！」

「違います！ 私です！」

僕は言い合う二人の間を裂いて、

「どーでもいいけど！ 最上階に避難するのはやめようよ！ この

ままだと僕が魔王に」

『どうしてもよくありません！』

怖い顔のウララちゃんとイリア嬢に言われて、僕は思わず言葉を飲みました。

そのまま僕は半ば強制的に二人から最上階に連れて行かれて、そして……。

「ヤマダさんの隣は私です!」

「いいえ、イリアです!」

「ちょ、待って二人とも! ってか、なんで喧嘩になつてんの!？」

「ヤマダさんは黙っててください!」

「そうです! 女の喧嘩に口挟まないでください!」

ええええッ! なんてそんな事態になつてんの!？

はたと気付いて見回す最上階。

最上階 王の間では、幾人ものゴースト達が黒い鎧よろいや悪趣味な兜かぶとやマントを手に、王座のところで今は亡きダンジョン・ボスを想つて泣いていました。

僕は慌てて二人を止めます。

「ちよつと待って! なんかヤバイよ!」

すると泣いていたゴーストが僕たちの存在に気付いて言います。

「おや? クレイシス様のご友人たちがどうしてこちらに? まあ理由はどうあれ、外はレベルの強い勇者どもがうろついていて危険です。ささ、どうぞこちらへ。我々がお守りいたします。」

おお、あなたは特にレベルが低い。水色スライムと同じレベルとお見受けします。勇者に襲われる前にどうぞこの防具を。

え? これですか?

これは……ふふ、そうですね。昨日まで魔王様のご友人であるバラモン様がお使いになられていたものです。気にしないでください。バラモン様はもうここには居ませんから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3279o/>

---

勇者ヤマダ【見習い編】

2012年1月13日20時48分発行